



TITLE:

ジュ井シ天文臺の婦人臺長

AUTHOR(S):

CITATION:

ジュ井シ天文臺の婦人臺長. 天界 1926, 6(62): 142-145

ISSUE DATE:

1926-02-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/160507>

RIGHT:

ジュ 併シ天文臺の夫人臺長

過去二十年の間、助手として、カミュ・フランマリオーンの傍を片時も、離れた事のなかつたさいふ夫人が、天文臺の近所に生れたさいふのも、よくよく不思議な縁があつたればこそなのでせう。

ムドンは菩提樹街大通りの十五番こそ、ガブリエル・ルノド嬢の生れたところで、この大通りは古城の廢墟に建てられた天文臺に通じて居りました。

嬢は母親の方から言へばローマ人で、父親の方からいへばパリッ兒で、お母さんの名はマリア・ラチナ、あのアンリ・ルニョーの名畫サロメのモデルで、お父さん名はルノドさいひ、その頃知名の彫刻師でありました。嬢はその幼年時代を、今も尙、ロンサルやラブレエの思ひ出深い小さな生れ故郷に、送りました。シュリイ・ブルユドヌは屢々此の地に來り、嬢の父の家を訪れては、嬢を殊の外愛撫したさいひます。此の嬢こそ、後にフランマリオーン氏夫人となつた方です。

ルノドの一家は、ムドンを去つて、パリに居を定め、天文臺街廿二番に落ちつきました。そして七歳の齡を以て、幼いガブエリルは女學校に通ひ初めたのでした。その女學校は、パリのカシニ街の角、天文臺街通り四十番地に建つて居りましたが、その五階目に、一八七〇年から死ぬるまで、カミュ・フランマリオーンが住んでゐたのも何かの因縁さいふのでせう。

當時、既に名聲の高かつた星學者フランマリオーンの過ぎ行くのを見るにつけ少女の胸は、ぎんなに、をさつた事でせう。そして、永い永い間の後には、お弟子から祕書になり助手になりして、やがて、學殖深いあの學者の伴侶となり——そして此の家の屋根の方から一階目で日を送る様な身分になりたい、さいふ様なこそまで思つたのでした。それから九歳の時、嬢の勉強先きは、リセ・フェヌロン通りに移りました。そこで彼女の女はスクスクミ八年間展んでいつたさいひます。そして此の頃から、嬢は研究に一生を捧げやうと深く心に誓ひました。しかし既に彼女の女の心は自然科學に魅いられて居ましたし、既に彼女の女は、天空に向つて話しかける事を好んで居ましたし、人々は彼女の女を天文學者なきと言つて喜ばせたりしましたから。

併し、嬢の両親は嬢の科學的探求の傾向を喜びどころか却つて苦にやんで、何うにかして嬢の志をひるがへして、嬢を面白い藝術や世俗的な楽しみの方に向はせて、當世風に育てやうと強いましたが、なかなか嬢の決心は堅かつたのです。そこで両親は嬢の學校へ行く事を禁止してまで、その意志をひるがへさぬ刑罰しましたが、此の刑罰が續けば續く程、嬢の科學的探究心は、いやが上にも燃えるのでした。

上その内、嬢の身の上に不幸——家庭上の激變——が重さなつて、やつて來ました。

若い盛りを、彼の女の母が死んだのでした。それから三週間ほさして彼の女の父もその妻のあこを追つて死んでゆきました。定めし、突然の悲しみや、別離の哀惜が、彼の健康を奪つたからなのでしょう。

人の世に、ただ一人こり残された、うら若い身を、ガブリエル・ルノド嬢は何さか方法を講じなくてはならなかつたのでした。

丁度その頃、嬢は家の者と共にカミュ・フランマリオン氏より素晴らしいお招きを受けて、屢々カミュ街を訪れた事がありましたので、嬢は氏に、此れまで堪えしのんできた口惜しさを打ち明けました。絶えず研究を思ひ止まる様に仕向けられ、就中彼の女が憧れきつた天文學の研究を思ひ止まる様に仕向けられてきたその口惜さを物語りました。

思ふに、これは、嬢が、フランマリオン氏を學者として深く尊信して居たからなのでしょう。實際その頃フランマリオン氏は、聖徒の如き眞實さを以て、又人間の凡ての野心から脱却して、全く獨立不羈の精神を以て、而も全く欲得を離れて、餘りに世俗的な同胞の爲め、天文學的眞理の光明を無智の世界の中へ投げこんで居たのです。無智の世界に住む人は恰も宇宙の廣大無邊の中にあつて、その伴侶者を失つた盲目の微粒子の如きものである事を思へばフランマリオン氏のこうした舉行の如何に尊いかが分りませう。

十八歳にしてルノド嬢は、カミュ・フランマリオン氏の祕書となりました。爾來仕事に身を捧けて、勵みましたが、その傍ら、*La Nature*, *la Revue scientifique*, *La Revue général des sciences* 等の諸雑誌に盛に投稿しました。

一九一二年にバリの新聞社は通俗科學の記事の爲めに、彼の女を何んなに歓迎した事でせう。こりわけて、彼の女が、フランスに於ける新聞の創成者として、新聞界の父として、知られたテオフラスト・ルノドの後裔であるこ讀者諸子が知られるならば、その歡待の程も思はれて充分と思ひます。

嬢の仕事は天體觀測にも及びましたが、フランマリオン氏この平和なる此の研究は世界戰爭の爲めに、妨けられたのでした。

一九一四年に自ら志願して、シエルブールの海軍野戰病院附きの看護婦となりました。そして服役中に得た負傷の爲め、その役をやめなくてはならなかつたのでした。その負傷によつて、銀の名譽賞牌を授けられて、パリに歸つて參りました。ところが、フランマリオンが出征した爲めか、氏が一八八七年に基礎を作り上げたフランス天文協會が正に危期に瀕して居りました。そこで凡てを一身に負うて立つた嬢はあらゆる奮闘をなし、忠實なる後任者であつたソーシェー氏と交代して、一九二〇年までは、祕書代理としての役目を立派に果しました。

彼の女は、限りなき破端の不安の中にあつても、此の協會の毎月の會報を正確に發行してのけました。又此の協會の會員の募集にも少なからず成功しました。

一九一五年以來ガブリエル・ルノド嬢は、ジュピシ天文臺の助手となつて居ました。そして、望遠鏡發明以來火星について觀測されて居る凡ての事實を舉げて、論議してある、言はば火星の百科全書ともいふべき“La Planète Mars”の第三卷の編纂にかゝつて居たのです。此の書物の内第一卷第二卷は既に出版されて居ります。

最初の夫人を失くして居たフランマリオンは一九一九年九月九日に、ルノド嬢と結婚したのでありましたが、昨年六月三日に、世にも稀れる學者同士の此のつながりも破られてしまつたのです。カミュ・フランマリオンは夫人のやさしい腕に抱かれて、あのなつかしい大空を仰ぎみづら、息を引きこつてしまひました。

星學者にして、フランマリオン程人々から愛好され、傾聴された人は數多くはありますまい。思ふにこれは、氏が其子弟を教導するにも、又講義をするにも眞實と熱心を以てし、加ふるに科學的嚴正を以てしたからだと思はれます。

その人も、今は、妻であり學問上の友である夫人に、重い重い仕事を遺して逝つてしまつたのです。夫人にこつては、それが如何程光輝ある仕事にせよ可成りの重荷には違ひありません。

ジュピシ天文臺長の名に於て、夫の遺稿出版を受け持つ事となつて居る夫人は、一方に於て、昨年の六月十日、世人の期待通り、喝采裡に、祕書課長に選舉されました。そして夫に代つて、フランス天文協會の代理職についたのです。その職たるや、實にフランマリオン氏が多年の間壯者也凌ぐ熱心を以て務めてきたものでありました。夫人がその後繼者となられた事の當然過ぎる程當然だつた事は夫人の人となりを思へば充分でせう。

最後に既に、申しましたフランマリオン氏の遺稿の事について、一言附け加へて置ませう。

氏の存命中出版された氏の著書五十五卷は何れも、各國語に翻譯されてありますが、その外に、氏の手になる未刊の原稿が非常に澤山ある事は疑ひのない事です。最後まで、驚くべき活動力と、能力を持つて居たフランマリオンにして見れば、又當然の事といつて、いいでせう。氏が如何に活動力を持つて居たかは今正に出版されんとして居る

Les Fantômes et les Sciences d'Observation

を氏は死ぬる前の日まで校正して居たといふ事によつて、伺はれます。その他、澤山氏の著書が出版されようとして居りますが、その中でも、氏の備忘録第二卷(これはもう出版になつておる事と思ひますが)は、ずつと以前から、氏

の友人や氏の崇拜者達から、一日千秋の思ひで待たれて居るものらしく、尙夫人に委ねたものの中から目星しいものをあげます、

Philosophie astronomique; le Monde invisible;

les Métamorphoses du globe: l'Autre Monde

なごがあります。併し何れいつても彼が全生命をブチこんで居たものは

Astronomie populaire

であつて、此の書物に更らに、天界永讃記念碑さもいふべき立派な美しい澤山の寫眞を挿入して新刊さして、世に出さうさいます。此の著書によつて、彼が天文學的天稟の豊かさを知り得て充分ださ、いはれて居ります。

最後に、私さもが襟を正して傾聴すべきさがあります。フランマリオン氏は死ぬ朝までも、一九二六年の天體觀測の『手びき』にも天文年鑑第六十二號を校正して居つたさいます。氏の天文學熱愛の程も偲ばれて奥床しい限りではありませんか。氏にも優れて、女性の身であり乍ら、天文學熱愛の夫人の爲めに限りなき幸福を祈つて筆をおきます。(L'Illustration, 27 Juin 1925より)

——能田忠亮譯——

天體方位測定機について

會員 津 田 雅 之

天體の位置、運行並に天體相互の位置關係を知ることは吾々初歩の天文趣味を誘發し、進んでは測定的に研究を導き、不知不識の間に天文知識の根本を培ふものである。天體測定機としては種々専門的高尙なる物は已に多数に有るけれ共その價の廉ならず従つてその設備をなすことは一寸さ素人向には出來かねるものである。使用法の簡單にして費用も少く素人として誰れにても準備し得て而も學術的である機構を案出したいさ願望して今回圖示せる如き測定機を考案するに至つた。本機は小學生中學生より或る程度の専門家にも使用するに價するものであるさ信する。

本機を使用して測定し得る事項の概要を記するさ

1. 三等星までの天體を測定するさ出來る
2. 天體の位置(方向さ高度)
3. 北極星さ天の北極さの偏差
4. 太陽の運動狀況
5. 月の運動狀況

6. 恒星の運動
 7. 天體間の角距離
 8. 太陽や月の直徑(角度)
- なほ本機を地理的に應用すれば
9. 地物の方向及高さ(角度)
 10. 彼我土地の高低比較

等

右の諸目的に使用すること得、且つ約十秒角單位までも比較的正確に測定することを得ることを實驗した。

本機の構造は上の目的のために方向角さ高度角さを測定すべき兩主要部さ之れを運用すべき諸設備から成る。即ち臺板(チ) (挿圖参照)は三脚(カ)を開閉することにより水平に置くことを得るものにして、その水平檢定は之れに垂直なる縦桿(ホ)の側面に附設したる垂下錘(チ)による。横桿(ニ)は照準用にして照準器(イロ)を有し、關節(タ)によりて緩着せしめ、水平方向よりの高度を測定するものさす。之れがため高度角を示す角度弧(ヘ)を具へ齒車(ト)により上下するものさす。照準器(ハ)は太陽測定の場合に限り扛起使用する